

Y B1-14

リハビリテーション科における安全管理～ 急変時シュミレーションを実施して～

前橋赤十字病院 リハビリテーション科
○町田 裕子、田中 真理子、朝倉 健

【はじめに】

当院は平均在院日数13.7日の急性期病院であり、リハ依頼患者の多くが状態が不安定である。一方で、リハ室の環境は急性期に適しておらず、スタッフは急変時の対応に不安を抱えている。そのため、リハ室での急変に備え、救急部医師 (Dr)・医療安全看護師 (Ns) らと急変時シュミレーションを実施した。今回はその結果と今後の課題を報告する。

【リハ部門の環境と課題】

スタッフは合計12名であり、経験年数5年以上が4名、5年以下が8名である。リハ依頼元は全科にわたる。リハ室は本館1階の外来部門にあり、他の外来診察室や病棟とはかなり離れている。各練習室も1階・2階に点在し、他職種の監視は届かず、すぐにかけてられる場所ではない。救命措置に必要な機器も常備していない。

【急変時シュミレーション】

参加者：リハスタッフ、Ns、Dr、外来Ns

方法：患者がリハ室で急変しDrが到着するまでのシナリオをNsと共に作成した。シナリオに沿ってロールプレイを実施した後に参加者らで振り返りを実施した。

結果：概ねシナリオ通りに遂行できたが、リハスタッフの急変患者の対応にはやや混乱がみられた。フィードバックでは、リハサイドから患者の評価・救命措置への不安が挙がった。それに対してDr・Nsよりアドバイスを受けた。その他、救急カートをリハ室に設置することも決定し、その管理は外来Nsが実施することとなった。

【考察】

シュミレーションをDr・Nsらを交えて行ったことで、具体的な問題点とその対応を明らかにできた。そしてリハ室の危険性が周知となり救急カート設置へとつながった。しかし、環境面の問題やスタッフの不安は残存している。今後はリハ室の環境整備の他、リハ業務の見直し、疾患知識・リスクの教育、シュミレーションの継続が必要である。

Y B1-15

医療機器管理等の院内ホームページの活用 (医療機器に係る安全管理のために)

名古屋第二赤十字病院 医療技術部 臨床工
学科

○中川 星明、中村 智明、梶浦 浪子、
江向 光希子、高木 茂樹、山田 悌士、
五藤 輝彦、長谷川 洋

平成19年4月1日より「良質な医療を提供する体制の確率を図るための医療法等の一部を改正する法律」が施行され、病院は医療の安全を確保する為の処置を講じなければならないとされました。医療機器の保守管理等に係る通知「医療機器に係る安全管理のための体制確保に係る運用上の留意について」において医療機器安全管理責任者の配置が義務付けられました。臨床工学技士は、その字の如く「臨床と工学」、まさに医療機器を専門に学んだプロフェッショナルです。それを自覚し、生命維持管理装置だけでなく医療機器全体の安全使用・保守点検・情報収集などを、手がけています。そしてその中で、医療機器の安全使用の為に必要となる情報の収集その他の医療機器の安全使用を目的とした改善のための方策の実施について、添付文書等の管理が重要となってきました。

今回、私達は医療機器添付文書をイントラネットの臨床工学技士ホームページ上に公開し、職員であれば24時間いつでも誰でも直ぐに簡単に閲覧できるようにしました。また、医療機器の研修情報や厚生省などが発信する医療機器情報も医療安全推進課とは別に掲載し、少しずつ理想のホームページに近づくよう努めています。

ホームページは、インターネット上にあるフリーソフトを用いて作成しました。管理運営は、臨床工学技士4名で行っています。4名ともプログラム作成に精通しているわけではありません。内1名はパソコンに不慣れな者でしたが、現在は一人でホームページの更新もできるようになりました。その詳細を報告します。